



提言書

2012年2月18日
JSAFキールポート強化委員会

はじめに

キールボート強化委員会は、国内におけるキールボートの普及と活性化、そして世界で通用する選手、チームの強化、育成環境の構築を目標に、昨年設立されました。

我々がまず最初に行ったのは、国内キールボート界の諸問題を徹底的に洗い出し、最善案を探る作業でした。

多方面、なかでも“現役”でセーリングされている方々に積極的に声を掛け、2011年5月から毎月の委員会の中で検討してきました。

その結果として今年は、日本マッチレース協会に協力、3月にキールボートを使う、JYMA選抜大学対抗マッチレースを開催することになりました。分母の大きい大学生にキールボートに乗ってもらう場を作ることが目的です。

そして、セーリング界最大の問題である若い世代のセーリング離れを緩和し、生涯スポーツとして愉しむ契機になるように取り組みます。

今後もキールボート界への勧誘のきっかけにもなるように、毎年開催を目指し支援していきます。

今回、我々の議論の中で具体的に構想化された事業案をJSAFに提言させていただき、ご検討いただきたいと思っております。以下の事業案を中心に議論、活動をしていきます。

キールボート ナショナルチーム構想

現状と課題

- 海外のレース実行組織からJSAF事務局へ、毎年数多くのインフォメーションが届いている。しかし、JSAFからの告知がわかりにくかったり、準備期間が無く、辞退するケースが非常に多い。
- 更に、海外招待レースに日本代表で参加するのに、JSAF側で選考基準が存在しない。
- もともとオリンピッククラスのディンギーにはナショナルチームが存在するが、キールボート界には存在しない。
- 海外のトップセーラーは1艇種にこだわらず、様々な艇種に挑戦し、スキルアップを図っている。
- インカレ終了後の大学生セーラーや若い世代が、キールボート界へ進むきっかけが少ないので、必然的に高齢化が進んでしまう。

ファーストステップとして

- キールボート強化委員会内にキールボートナショナルチーム選考委員会を設置。
- 選考基準の草案を作成。
- JSAFに諮り、公認取得までのプロセスの構築。

セカンドステップとして

- 中国が行っているような、エントリーフィー、宿泊費、食費等をレース実行委員会が負担する国別招待レースが存在する。まずはそういうレースに派遣。
- セーリング界全体のボトムアップを図る目的のもと、JSAF公認のクルーとして、特に若い世代に海外レースへ出場する機会を与え、セーリング技術を国内にフィードバックさせる。
- ディングーでは活躍できなくても、キールボートで活躍できる場を提供することで、素質ある人材の発掘に繋げる。

最終目標として

- セカンドステップを効率良くサイクルさせ、将来アメリカズカップや、ボルボオーシャンレースで活躍する人材の発掘、育成。
- キールボート転向のモデルケースを作ることで、更に次世代のセーラーに刺激を与え、選択肢を増やす。
- 最終的には海外のトップセーラーのように、ディングー、キールボート等の艇種を超えたシームレスなセーラーを作り上げるのが目標。

更なるステップアップ 新たな構想

キールボートパーク構想

- 各ヨットハーバーに働きかけ、安価で借りられるワンデザインのレンタルボートの設置を依頼。若い世代をターゲットに、自艇は持っていないが、仲間同士で気軽にキールボートのセーリングを楽しめる環境の開拓、推進活動。
- 艇数を揃え、マッチレースやレガッタを開催。ヨットハーバー自体の活性化を狙う。
- この形が成功すれば、更に大型ワンデザインクラスの増設を目指す。それらを用い、海外ヨットクラブをモデルにした、ワンデザインキールボート主体の大規模なレガッタを開催するステップとする。
- 各ハーバーのレンタルボートが定着できるようになれば、それらを用い、セーリングスクールを開校。内外トップセーラーを講師に招聘し、上級者向けの指導も行う。
- ナショナルチーム構想にともない、選抜クルーの練習場所としても提供。その際、スクール受講生との交流により、セーリングレベルのボトムアップを狙う。

ジャパン レースウィーク構想

現状と課題

- たくさんレースに出場したいのに、レース日程が重複していて、選択に困る。
- 現在ヨットクラブによるクラブレースが盛んに行われており、これらを繋げキールボートの輪を広げることで、益々ヨットレースを楽しめる環境を作り出せるのではないかな。
- 出来ればホームポートのレースに出場したいが、やはり楽しい方を選んでしまう。主催側と出場チームとで、非常に満足度の差を感じる。
- 楽しい方を求め、ホームポートの移動にまで発展すれば、二極化が加速し、広範囲での活性化には繋がらないのではないかな？
- 海面が隣同士で独自にレースを行っているのを、共同開催、もしくはサーキット形式で、各水域を転戦する仕組みを作れば、艇数も増えるし、交流も増えて活性化するのではないかな？

ファーストステップとして

- まず相模湾をベースとし、近隣水域の主催団体との合同で行えるレース日程を調整。運営、ルール等のすり合わせ。
- 試験的に開催。段階的に修正し、モデルケースを作成。

セカンドステップとして

➤既存レースを組み合わせ、近隣水域を転戦するサーキット形式のチャンピオンシップ開催を提案。水域全体での活性化を狙う。

※キールボートシリーズ相模湾2012の開催が決定。
2012年2月5日にトライアルを開催。

➤J/24、プラトゥ、melges等のワンデザインキールボートとの共同開催。

➤相模湾以外の水域にモデルケースを提案。

最終目標として

➤最終的にハンディキャップをIRCルールに統一できれば、JSAFへのIRC登録艇の増加に繋がる。

➤ディンギーから大型キールボートまで多くのクラスが、同じハーバーもしくは水域でレースを行うナショナルレガッタを開催する。ジャパンレースウィーク(仮称)。

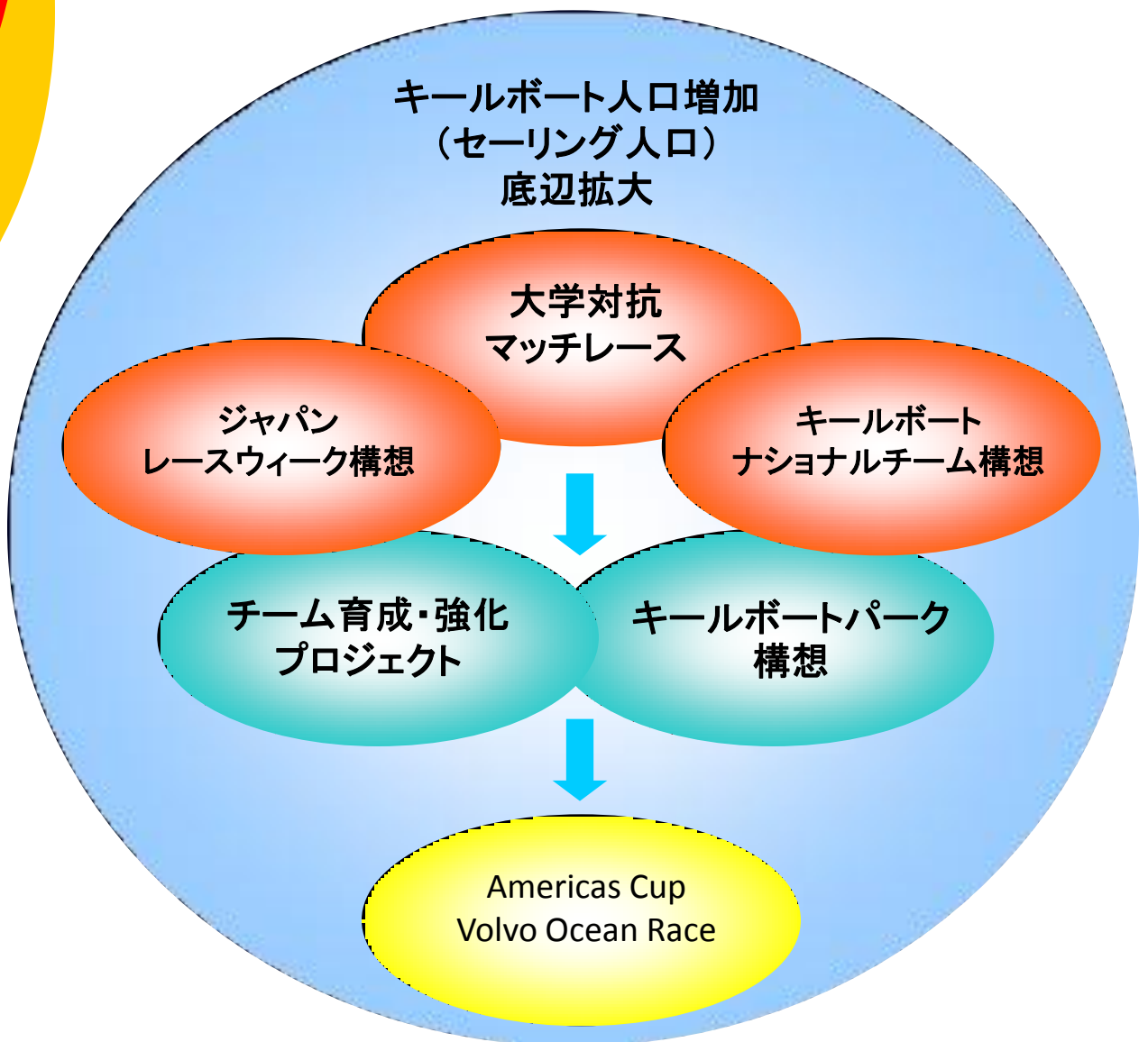
➤ディンギーセーラーとの交流の場を作ることで、セーリング界全体のシームレス化を狙う。

更なるステップアップ 新たな構想

チーム育成・強化プロジェクト

- ▶ ナショナルチーム構想とは別に、オーナーシップのチームが、ストレス無く海外遠征を行えるようなポート、チームマネジメントができる人材を育成することを目的とするプロジェクトの立ち上げ。
- ▶ キールポート界全体が活性化すれば、自ずとセーリングスキルの高い海外へ、自チームのスキルアップを目的に遠征を行うチームが増える。そういったチームへの支援として、海外の転戦経験の豊かな人材を派遣し遠征のノウハウを教育。
- ▶ 技術もさることながら、チームをオーガナイズする能力であったり、マネジメントする人材が増えることによって、海外遠征をするチームの更なる増加を期待。そして海外のセーリングスキルを国内へフィードバックするサイクルの構築を目指す。

提言内容の解説図



最後に

2011年5月、委員会の立ち上げ当初、議論がたびたび紛糾し、正直どうなるものかと思いました。

ただ、参加された方々の様々な熱いご意見を聞き、「本当にヨットが好きなんだなあ・・・」と改めて肌で感じ、同時に、「将来を憂いてる人がたくさんいる・・・」と深く考えさせられました。

こうやって本年度に選抜大学対抗マッチレース、そして、来年度にキールボートシリーズ相模湾2012と、たった1年間の活動で結果を残せたことは、正直、奇跡に近いです。

ご協力いただきました皆様、及び委員会メンバーには心より感謝しております。

皆様の熱い気持ちがこうして形に残ったものと感じています。当委員会は、この提言書をJSAFへ提出することで、日本のセーリング界がすぐには変わるとは思っていません。

あくまで「きっかけ」と捉えております。

皆様と一緒に日本のセーリング界全体を盛り上げていく覚悟です。

今後共、お力添えの程、よろしく願いいたします。

JSAFキールボート強化委員会
委員長 中澤信夫